

プロが教える 株式投資の 基礎知識 新常識

儲かる仕組みとお金の増やし方

林 知之

一生稼ぐ！
相場の
教科書

まえがき

●食材カレシピカ

必要な食材さえ手に入れたら、誰でもおいしいカレーを作ることができるだろうか――。

「これは料理の本？」などと、タイトルを見直さなくても大丈夫。間違いなく、株の売買、相場の張り方についての本である。

そして本書の狙いは、プロ投資家の思考に触れることによって、個人投資家が投資で成果を上げるための認識や考え方を一気に高めてもらうことだ。

言い方を換えれば、一般の投資関連情報、つまり情報発信者側のビジネス優先思考によって生まれた、残念な誤解に気づいてもらうことだ。

あなたがベテラン投資家なら、すでに経験から多くを学んでいるはずだが、頭に残る誤解の断片に気づいて、もう一段上のステージに向かってもらいたい。

話題となった「老後2千万円問題」を機に資産運用を考え始めた若者や投資未経験者ならば、株式投資を正しく認識する最短距離を進んでほしい。また、おカネのことを考え直そうというシニアは、人生経験のフィルターで本書の内容を整理、活用してほしいと思う。

さて、なぜ「食材」と「カレーの味」に触れたのかを説明したい。

世間の投資情報は、料理における食材（銘柄情報）にしか目を向けていない。しかも、食べてみないと（あとにならないと）わからない。食材の良しあし（上がるか下がるか）に焦点を当てている。調理法（レシピ）（投資手法）や道具の選び方など、真の実践に必要なことが抜け落ちている。前述した「ビジネス優先の投資関連情報」の特徴である。

私は、「これが、金融業界における最大の問題だ」と常日ごろから考えていて、端的に概要を示すには身近なものと比較するのが適切だと考え、カレーにたとえてみた次第だ。

本書の内容は、無理やりに食材の良しあしを当てようとするのではなく、「たとえ食材がいまひとつでも、そこその結果を出す」調理法を考えることに重点を置いた『実践の書』である。一般の入門書には書いていないプロの発想を紹介するため、「株は安く買って高く売るもの」という捉え方は誤解だ」など、ほとんどの読者が「えっ？」と思うようなことまで文章にした。すべては、これまでに出会った実践家との意見交換で培った考え方であり、無責任な入門書や投資家を「踊らせる」ことに主眼を置く業者の観点とは完全に一線を画するものと自負する。

●個人投資家の戦い方

本書を手にとった投資家が、「読んだだけで明日から儲かる方法を知りたかったのに……」

と落胆するか、「目からウロコ」あるいは「これまでにない観点が述べられている」と評価してくれるか、不安もあるが、もちろん後者を狙って本音だけをつづった。

本書に盛り込んだ数々の実践論は、実父の林輝太郎など、感覚を駆使する昭和の相場師から、コンピュータのデータ処理を活用して自動売買で稼ぐ現役のトレーダーまで、多数の成功者を見てきた結論であり、私自身が実践して確かな手応えを感じたものである。

結果として、深く切り込みすぎて、くどい部分もあるが、私たちが持ち合わせるデリケートな心理を大切に扱い、丁寧な考察をした結果だと受け止めてほしい。

最後に、一般向けの書籍にプロの発想を凝縮した理由を、別の観点からも述べておきたい。株式市場に、アマチュアだけの場、初心者にハンディを与えてくれる場は用意されていない。コンピュータプログラムによる超高速売買、一匹狼の超ベテラン相場師、名だたるファンドマネージャーまでもが同じ土俵にいる。私たち個人投資家がプロ投資家と異なるのは、「失敗しても、追加の資金をもらえない」という一点である。では、表裏一体の強みはなにか――。

本書でプロ投資家の思考に触れ、社会人としてのバランスを保ちながら株式投資のあり方を考え、個人投資家ならではの「戦い方」で、満足できる結果を出してほしいと強く願う。

2019年11月

林知之

プロが教える
株式投資の
基礎知識
新常識

01

入門書に書いていない
儲ける
ための基礎

1. なんのために株式投資をするのか 12
2. トレードと人間心理のビミョウな関係 20
3. 順張りか、逆張りか 28
4. チャートの読み方① 値動きは連続するのか 36
5. チャートの読み方② 理屈ではなく感覚で見る 44
6. 上げ相場と下げ相場のちがい 54
7. 信用取引はもろ刃の剣か 60

プロが教える
株式投資の
基礎知識
新常識

02

初心者が
勘違いしている
常識のウソ・新常識

1. 計画的ナンピンとチャレナンピン | 68
2. 「株は安く買って高く売るもの」という誤解 | 76
3. 移動平均線の実用性と予測の限界 | 82
4. 移動平均線、日経平均株価が使えない理由 | 92
5. 正しいトレードでは損が先行する | 100
6. 日柄を見る！〜相場要素を適正に観察する目 | 108
7. 「利食いドテンは愚の骨頂」〜そんなにダメなことなのか | 116

プロが教える
株式投資の
基礎知識
新常識

03

株式投資は 正しい技術を学べば 上手くなる

1. 指し値注文か、成り行き注文か
2. 指し値を使った注文テクニク
3. トレード戦略とポジション操作
4. 分割売買で値動きに対応する
5. ツナギの単純な活用方法
6. 職人の売買「うねり取り」
7. 手仕舞いは「仕舞い」にあらず

プロが教える
株式投資の
基礎知識
新常識

04

プロの視点で
相場と向き合う
具体的方法

1. 個人投資家こそプロの視点をもつべき
180
2. 「引き算」の思考で、行動の精度を高める
188
3. タテ軸を見るな！
194
4. 値頃感（ねごろかん）で相場を張るな
204
5. 手法を比較する、優劣や違いを考えるポイント
212
6. 過去は未来を映す鏡ではない
222
7. 相場の予測とは何か、相場の時間軸「過去・現在・未来」
228

5. チャートの読み方②↳理屈ではなく感覚で見る

●トレンドは仮説

チャートの存在そのものを否定する人たちは、次のようにいう。

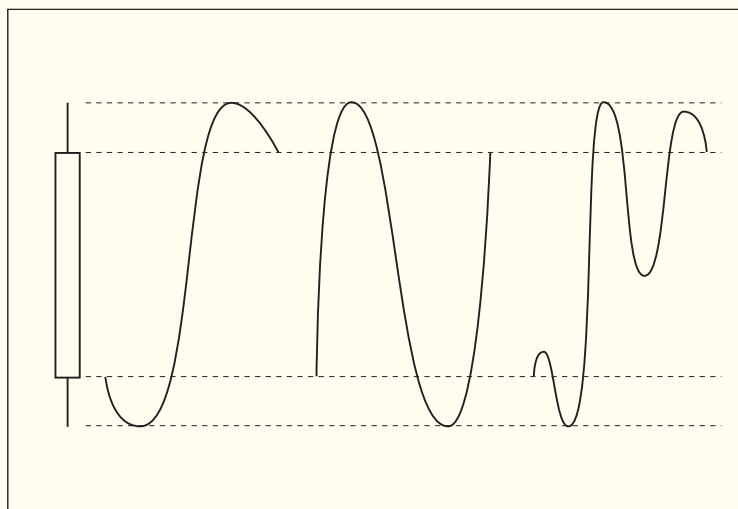
「マーケットでは個々の取引が多数起こっているだけだから、ローソク足のように複数の要素を1本の線にするのはおかしい。また、値動きが日々あるいは月々、連続しているかのようにつなげていく折れ線チャートも理屈に合わない」

この理屈は認めざるを得ない。だが将来を考えるうえで、「今は上向きなのか下向きなのか」を自分なりに決めないとポジションを取ることができない。だから、ムリがあることは承知で、値動きに連続性をもたせたチャートを使うのである。

株価のチャートをジッと眺めている人は時として、狂信的でおかしい人物と評される。だが、チャート否定派の理論こそ、「将来を当てられるか」「数あるチャートの表現方法に合理性はあるか」と、よほど狂信的な思考をしていると感じる。

相場の方向性（トレンド）を、仮にでも決めないと行動できないから、チャートを引いて仮

図表1-3◎同じローソク足でも途中の動きはさまざま



●ローソク足の高値と安値

説としてのトレンドを探しているのだ。ケイ線屋と擲^や擲^ゆされる少数派は別にして、「予測が外れること」「わからないから何もしないという結論」を容認しているのだから、価格の連続性をネタにする否定派とは議論する意味がない。

つまり、不備があることを受け入れ、そのうえでチャートから何かを見つけようというのがわれわれプレーヤーの狙いなのだ。

とはいえ、ローソク足のヒゲを構成する「高値」と「安値」は、ちよつとだけ気になる。

高値と安値の具体的な時期がわからないから図に示すように、同じローソク足でも値動きの推移にはいくつものパターンがあり得る。

上に示した3つの波形は、どれも左側のロ

ソク足になるのである。

これも、チャート否定派のツツコミどころだが、実践論としては、「おっしゃる通り、チャートは不完全だ。だから、枝葉末節な見方はしていません」というところに落ち着く。

新聞などの市況解説のように、値動きの推移をドラマ化したものはダメだということである。例えば、次のような解説だ。

「朝方は海外市場の上昇を受けて高く推移したが、前場の終わりからは利益確定売りに押されて伸び悩み、午後2時過ぎに〇〇の決算が市場予想を下回るとの観測が出てからは輸出関連を中心に売りが優勢となり、日経平均は前日比マイナスで大引けを迎えた」

トレードは、ある意味、将来のドラマを想定してポジションを取る行為だから、ドラマ化がすべてダメとは言わないが、過去のドラマに縛られる姿勢は実用的ではないのだ。

ローソク足の高値・安値について時間（月足ならば日ひち）を特定して掘り下げたら、それこそ狂信的な方向に近づいてしまう。

●タテヨコ比は最も重要

さて、チャートは、欠点を容認したうえで実用的な使い方をすればいいと結論づけた。欠点を容認するためには、細かいことを気にしない。大ざっぱな姿勢が求められる。

だが、絶対にこだわりたい部分だって多くある。そのひとつが、チャートのタテとヨコの比率だ。昔ならばチャート集、現在ならばパソコンの分析ソフトやインターネット上のチャートは、タテヨコ比について全く無頓着である。

例えば日足を表示する場合に、画面の左端から右端までが「3カ月」というように一定にしたとしても、タテ方向の「値幅」はその期間の値動き次第だ。その3カ月間の動きを、画面いっぱいに表示する、と定義するのが構造上、自然だからである。

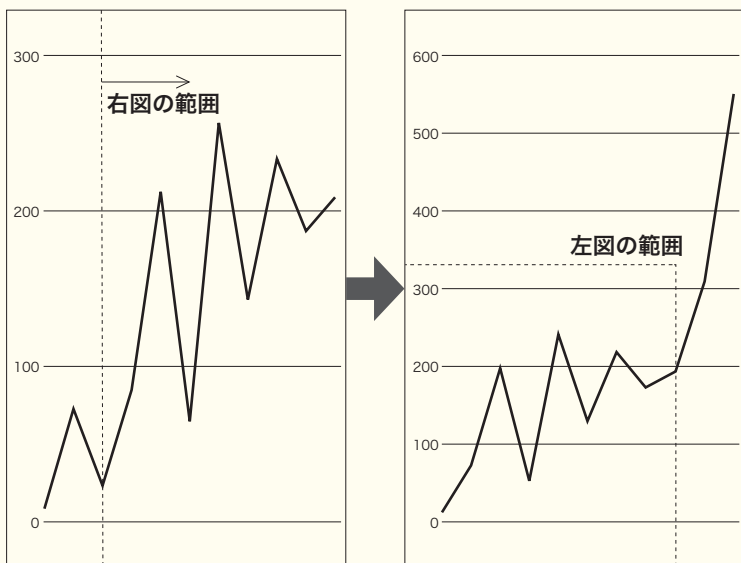
例えば値動きが小さい場合、画面の下端が0円で上端が300円だが、暴騰して550円になれば、下端が0円で上端が600円と、タテ方向だけ以前の半分に縮小されてしまう。

次ページの図に示すように、値動きが小さかった時期の振幅が、まるでちがって見えてしまうのだ。

身近なものでいえば顔写真だ。タテヨコ比を無視したら、その人が丸顔なのか面長なのか全くわからない。

1つの銘柄だけを見るとしても、絶対的な感覚というものがあるから、タテヨコ比は一定であることが求められる。また、複数の銘柄を比較してみることもあるし、単一銘柄の売買でも銘柄を乗り替えることがあるのだから、道具としての規格を決めておかないと、見る人間の感覚に狂いが生じてしまうのだ。

図表1-4◎値が動くとタテ軸の基準が変わる



「大ざっぱ」に見るということは、数値化できないデリケートな感覚で、チャートの値動きを認知する作業なので、気をつかう部分なのである。

●対数グラフ

タテヨコ比について神経質なことを述べたので、タテ方向の比率についても細かいことを確認しておこう。

タテヨコ比をそろえてチャートを作る最も簡単な方法は、方眼紙に手描きすることだ。市販の方眼紙にチャートを描き、タテ方向は1ミリが1円と決める。老眼になると1ミリ目盛がやっかいだが、常に1ミリが1円というのはスッキリしていてわかりやすい。

だが、「1000円前後の1円と10000円前後の1円が、同じ1ミリでいいのか」という疑問が生じる。株価の変動を「率」で考えた場合に、合理的ではないという指摘だ。

1000円と10000円では10倍の開きがあるから、同じ1円の変動が、1000円ならば1%、しかし10000円ではわずかに0.1%で、その差を修正したものにするべきだという意見は、納得できるものだ。そこで登場するのが、対数方眼紙である。

同じ1円を、安値圏よりも高値圏で小さくするのだから、特殊な目盛りの対数方眼紙を使うしかない。こういう特殊な目盛りを用いた「対数グラフ」ならば、安値圏でも高値圏でも「変動率」を同じように感じさせてくれる効果が期待できる。

ちなみに、ヤフーファイナンスでチャートを表示させると、デフォルト（初期値）の「標準」という設定で、価格帯にかかわらずタテ軸は等幅の表示だが、「スケール」という項目で「対数」を選ぶことができる。ただし、前項で取り上げたタテヨコ比の問題は解決されない。

さて、「なんだか合理的だ」と思える対数グラフだが、実際に作ろうとすると、いくつもの問題が発生してしまうのである。

●人間の補正能力

対数方眼紙があれば、いわゆる「変動感覚」によるチャート観察の質が高まる——前述した

5. 正しいトレードでは損が先行する

●まず損より始めよ

「損小利大」が実現すれば、ストレスなく儲かるだろうと安易に想像してはならない。

例えば、「上がると判断した10銘柄を、同時に買った」場合を考えてみよう。裁量でもシステムでも、どちらでもいいのだが、現実の「損小利大」をリアルに想像してほしい。

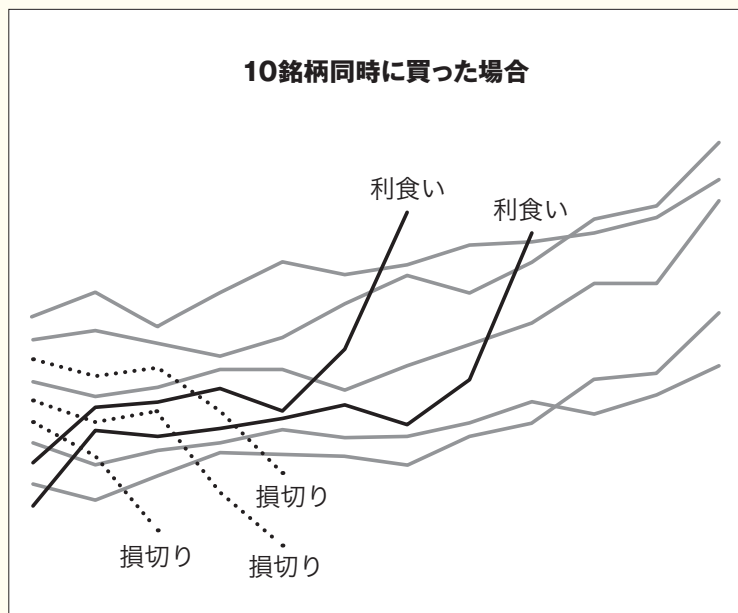
損を小さく抑えるには、ダメなポジションの損切り手仕舞いを早めに実行するよう努める。

値動きが弱々しくなった段階でチェックし、大きく下げてしまう前に切る、ということだ。

これに対して、**「良いポジション」だと判断したものは、値幅を取るために一定期間ねばる**。すると、次ページの図のように、損切りが先行し、利食い手仕舞いは時間的にあとになるのが必然なのである。

この図は、10銘柄のうち3割にあたる3銘柄がダメだったという結果で、2銘柄は早めに値幅を取って利食い手仕舞い、半分の5銘柄は評価益のまま持続という、的中率の高い、実に素晴らしい結果を示している。

図表2-5◎損小利大では負けが先行する



「素晴らしい結果」なのに、なんと仕掛けたあとに損切りが連発する。これが、現実なのだ。

資金稼働率の設定にムリがあると、適正なトレードが進行しているにもかかわらず、初期に起こる損切りの連続で、次の仕掛けが物理的に厳しくなる。資金管理に問題がなくても、心が折れてしまう可能性がある。

良いシステムが、いい感じで機能しているのに、「この手法はダメだ」と判断して別の方法を探し始める、という悲劇が起こる背景がこれである。

トレードは大切なカネが絡む行為なので、切実な部分が大きく、同時にとてもデリケートだ。

したがって、ちょっとした勘違いが大切な判断を誤らせ、良い手法に出会ったことが正しく認識できず、手法をやみくもに探し続ける「相場難民」になってしまうのだ。

別の見方をすれば、「ダマシをどう認識するか」「ダマシをどのように容認するか」ということである。結論は「黙って従うしかない」「ただ受け入れるしかない」のだが、「損になるケースも受け入れましょう」だけでは、「精神的なつらさ」が勝ってしまい、トレードを継続していくのは難しいだろう。

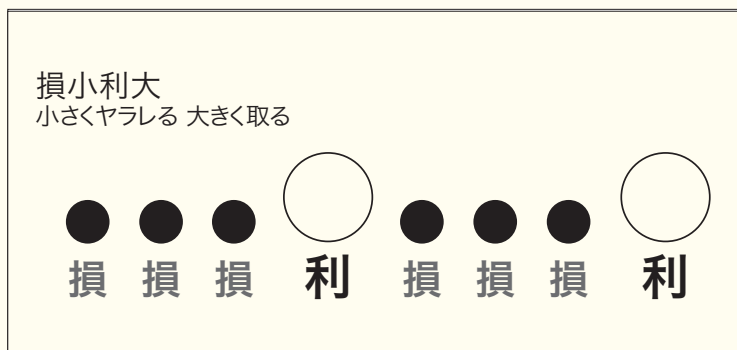
最終的にはプラスの成績にするためにトレードするのだから、ダマシの出現による「負け」を想定するのは別に、いや、それ以上に「勝ち」のイメージをもつべきだ。心のもちようの問題である。混在する「勝ち」と「負け」で、トータルがプラスになるようにするのである。

勝率が5割、あるいは5割未満でも、負けが小さくて勝ちが大きければ、トータルでプラス、しかも満足できる利益率が実現する。これが「損小利大」である。

こういう流れを意識して、ダマシというものを、まずは理屈で納得することが必要なのだ。その次に、「負けがあれば、そのあとに勝ちがあるんだ」という感覚的な理解に至れば、勝ち負けが混在する現実のトレードを、極端なストレスなく継続していくバランスが整うと思う。

次ページ上図は「小さく3回負け、大きく1回勝つ」というパターンだが、スタート後に負けが4回続くかもしれない。その際、「なぜ負けたか」「なぜダマシになったのか」を確認す

図表2-6◎損小利大のイメージ



ることが不可欠なのだ。

使っているルールを熟知していれば、「負けちゃった」という負の感情を抱えながらも、将来のために落ち着いて考えられる理論的な裏付けがある。

自分が使っているルールについて、しっかりとした理解が必要だということである。

中身のわからないシステムを安易に使っていたら、ちゃんとした経験の蓄積ができない。サイコロをころがしたほうがましなのだ。良い結果も悪い結果も、自分なりに評価して納得し、体の奥底までスーッと受け入れるべきなのである。大きな勝ちが先行する場合もある。スタートして、いきなり期待以上の利益が出るというパターンだ。

こういった場合も「なぜ大きく勝ったのか」を確認しなければならぬ。感情に任せていると、「次も同じように大きく勝たないといやだ」などと自分の都合だけで考えるようになってしまうからだ。

このような感情の振れ、つまりバランスの悪い心の動きを説明すると、「そんなことはない」「私はそうならない」といった反論があるのだが、人間のマインドは必ず、状況に応じて、ある方向に傾く。だからトレードのカタチを整え、傾きを抑える工夫をするべきなのである。

●カタチによるリスク管理

まずは、リスク管理の方法を再確認し、少し突っ込んで考えてみよう。

- ・銘柄分散
- ・期間分散
- ・資金管理
- ・ヘッジ玉（ツナギ）
- ・サヤ取り
- ・ロング／ショート戦略

「分散投資は安全だ」という。たしかに「分散投資」は、部分的な見込み違いや不測の事態による被害を軽減してくれる。だが、単なる分散では、薄まるだけの結果になりかねない。

「ポートフォリオ分散」と考える人が多いようだが、それはちがう。100銘柄に分散するのもポートフォリオならば、戦略的に1銘柄に全資金を投下するのもポートフォリオなのだ。やみくもに分散するのではなく、競争に勝つために戦略を立て、意思をもってポートフォリオを決めたり、状況に応じて変化させる必要がある。

これに対して「期間の分散」は、値動きへの対応を素直に考えさせてくれる発想だと思う。「おそらく底だろう。しかし決め打ちはできない」と考え、少しずつ分散してポジションをつくっていくという、実践的かつ機動的な行動、「分割売買」のテクニックだ。

「資金管理」は、多くの人があまり考えない事柄だが、実は最も重要な要素である。常に目いっぱい建玉があるのに評価損ばかり、その状態で新しい銘柄に目が向くけど資金が足りない、そこで「何かを切らなければ」とやりくりする……完全に行き当たりばつたりの売買だ。

基本的な「設計」がない状態である。生活と切り離して固定しておける金額を取引口座に入れ、その資金を効率良く安全に動かしていくことに集中するべきなのだ。

「ヘッジ玉」「サヤ取り」「ロング／ショート戦略」は、方式としては異なるものの、いずれも、売りと買いを組み合わせるリスクをコントロールしようする方法論である。

ただし、単に売り思惑と買い思惑を同時にやるだけだと、やみくもな分散投資と同様、手数料が増えてコントロールが効かなくなり、良い結果が得られない可能性がある。

1. 指し値注文か、成り行き注文か

●指し値とは

指し値というのは難しいワザでもないが、簡単に確認しておきたい。

マーケットの価格は、常に変動している。そして、その変動で利益を得ようとするのが相場だ。しかし価格変動、つまり「うねり」とか「トレンド」と呼ばれる一定の潮流によって得られる値幅を狙っている場合でも、ごく短い時間で価格が小さく変動することに目をつけて、少しでも有利に売買しよう、と考えがちだ。その結果、指し値という選択肢が生まれる。

例えば250円で買って300円で売れば、利幅は50円である。これで十分だというのなら、買っても売りも「成り行き」で行えばいい。しかし、同じ時期に買って同じ時期に売りながら利幅を大きくしたいという願望は、自然なものだろう。例えば買いは2円下の248円で売りが3円上の303円ならば、利幅は10%も大きくなる。「これを見逃す手はない」というわけだ。実際に日々の価格のブレがどれくらいあるのかを、1821三井住友建設で確認してみたい。2019年7月～9月の3カ月間の4本値と出来高を、次ページに示す。

図表3-1◎1821三井住友建設の4本値と出来高

日付	始値	高値	安値	終値	出来高
2019/7/1	609	615	607	614	860
2019/7/2	615	617	611	614	621
2019/7/3	611	615	607	615	784
2019/7/4	619	627	619	626	633
2019/7/5	628	632	627	629	494
2019/7/8	629	633	627	630	472
2019/7/9	630	633	612	615	866
2019/7/10	612	614	601	602	973
2019/7/11	606	608	598	602	1268
2019/7/12	603	604	590	591	1111
2019/7/16	593	602	592	596	699
2019/7/17	590	594	586	588	920
2019/7/18	586	586	567	569	1108
2019/7/19	572	586	572	582	871
2019/7/22	586	592	579	581	523
2019/7/23	580	588	574	585	563
2019/7/24	567	573	558	570	1359
2019/7/25	568	571	562	569	784
2019/7/26	567	577	564	572	598
2019/7/29	572	575	565	575	693
2019/7/30	565	573	564	568	1105
2019/7/31	569	585	567	581	1087
2019/8/1	571	578	566	569	1102
2019/8/2	560	565	554	557	1195
2019/8/5	548	552	531	537	1072
2019/8/6	518	539	516	536	1240
2019/8/7	528	533	516	522	1440
2019/8/8	518	530	511	517	1530
2019/8/9	515	518	508	509	1735
2019/8/13	503	514	501	511	1255
2019/8/14	519	522	514	517	957

日付	始値	高値	安値	終値	出来高
2019/8/15	507	515	506	513	752
2019/8/16	508	514	506	509	1468
2019/8/19	517	524	514	521	576
2019/8/20	520	529	518	527	766
2019/8/21	523	526	520	522	725
2019/8/22	524	526	514	515	732
2019/8/23	517	525	516	518	670
2019/8/26	505	511	505	509	765
2019/8/27	515	517	510	511	661
2019/8/28	511	513	500	501	824
2019/8/29	503	512	501	511	932
2019/8/30	521	529	520	527	1290
2019/9/2	531	535	522	523	899
2019/9/3	522	528	520	525	733
2019/9/4	520	521	515	517	723
2019/9/5	519	530	517	525	844
2019/9/6	530	530	523	524	718
2019/9/9	524	539	522	536	845
2019/9/10	540	558	538	553	1143
2019/9/11	566	573	563	571	1372
2019/9/12	576	583	575	577	1387
2019/9/13	582	582	573	581	1078
2019/9/17	582	591	579	585	969
2019/9/18	575	575	560	564	999
2019/9/19	562	570	561	565	1149
2019/9/20	570	570	554	554	1153
2019/9/24	555	566	554	556	1116
2019/9/25	553	559	550	555	619
2019/9/26	562	563	554	557	918
2019/9/27	558	569	554	567	974
2019/9/30	567	575	564	567	651

※出来高は千株単位、千株未満を切り捨て

適度に上げ下げのある銘柄だが、この期間はたいした動きがみられない。それでも、終値で見て、7月8日の630円から8月28日の501円まで下げたあと、9月30日には567円まで戻っているから、波動に乗れば十分な収益が期待できる。そして、例えば次のように考えるのではないか。

「この上げ下げを丸々取ることはムリでも、半分くらいなら可能ではないか。そのとき、売りも買いもそれぞれ数円ずつ有利になれば（買いは安く、売りは高く）、実際の利幅は数%、場合によっては1割から2割も大きくなる」——これが、多くの人が指し値を使う理由だろう。

●指し値注文の成立と成り行き注文の成立

例として挙げた1821三井住友建設の、実際の指し値注文を見ながら説明する。

次ページ図で示したのは、2019年10月1日大引け後の、三井住友建設の板（いた）だ。板というのは、取引所で注文処理するときに使われるシートのことで、100%電子化された現在でも、古くから紙を使った手作業で行われていたものと同じ形式で画面表示されている。インターネット取引で個人投資家のパソコンに画面表示される板も、同じ形式のはずだ。

これは大引け後の板だが、ザラ場でこの板が目の前にあると仮定して考えてほしい。右側が買い指し値で左側が売り指し値、それぞれの価格に指し値の合計数量が示されている。

図表3-2◎三井住友建設の板（10月1日大引け後）

売り		買い
6,800	588	
17,300	587	
15,700	586	
33,600	585	
35,800	584	
47,400	583	
35,100	582	
42,200	581	
50,300	580	
8,800	579	
	578	3,800
	577	7,400
	576	9,600
	575	48,900
	574	43,200
	573	60,900
	572	33,700
	571	4,500
	570	22,700
	569	4,300

最も高い買い指し値は578円で最も安い売り指し値は579円、つまり俗にいう「578円カイ、579円ヤリ」という状況だ。仮に成り行きで5千株の買い注文を出したら、最も安い売り指し値である579円の売り注文とぶつかって売買が成立する。

「よし、579円で買える」と思って出したところ、一瞬前に「579円で8千株買い」という注文が出て成立していたとしたら、成り行きで出した5千株の注文は、「579円の売り指し値の残り800株」と「580円4200株」を買う結果となる。

このとき、「579円で買うのはいいが、579円と580円を買うのはイヤだ」と考え、あえて成り行きにしないで「579円、

5千買い」という注文を出すこともできる。

また、580円以上に適度な数量の売り指し値があることを理由に、「576円から578円に指し値を入れておけば、ザラ場のブレで今日中には買えるだろう」といった計算も、ごく自然な発想だ。指し値の使い方は、いろいろと考えられる。

●日常生活の指し値

相場における指し値について整理するために、日常の行為に当てはめて考えてみよう。

株や商品取引の指し値と全く同じものはないが、価格の変動に注目する行為や、指し値の要素を含んだ行為はある。

例えばマンションを買うときに、「もう1、2年待ったほうが安く買えるかもしれない」と予想したり、「十分な頭金を用意できないけれど、これから値上がりしそうだから今のうちに買いたい」と考えるのは、ある意味、相場を張るときに考えることと近い。

あるいは、マンションの面積や間取り、地域、駅からの距離などとともに価格の条件を示し、「条件に合う中古物件があったら知らせてほしい」と業者に依頼するのは、指し値のようなものといえる。

相場の対象となる「銘柄」は完全に規格化されているのに対し、マンションには統一された規格がない。だから、すべて相対（あいたい）で取引を行う。条件に合うと業者が判断したものについて、購入を具体的に検討するかどうかを決めればいい。

これに対して金融マーケットでは対象の銘柄が規格化されているので、「業者から情報をもらって考える」部分を抜きにした指し値というシステムがあり、もし指し値で買いの意思表示をしたら、その価格で売りたいという人が売り注文を出した時点で取引が自動的に成立する。

商店街での買い物は、株式市場のようにシステム化されたものとはだいぶちがうが、指し値の要素はある。商店が提示している販売価格は、いわば売り指し値のようなものだ。

1200円という値札がついていれば、それは「1200円ならば売ります」という店側の意思表示だ。「では、これをください」と私たちが意思表示すれば、「1200円という売り指し値を見て成り行きで買った」ようなものだ。

では、値引き交渉はどうだろうか。1200円という提示価格に対して、「オジサン、3つ買うから1つ1000円ちょうどにしてくれない？」というのは、「1200円という売り指し値があるところに、1000円ちょうどで買い指し値を入れて、相手の出方を探る」ようなものだと言明できる。

●マーケットの特徴

前述した「日常生活の指し値」は、少しこじつけみたいなどころもある。だが、こんなふうに分解して考え整理してみると、意外な発見がある。少なくとも、自分の行動を分析することができるだろう。

相場技術論は感覚で売買することを主張する考え方だが、感覚を使うのは最終的な売り買いを決断するときであって、基礎的な知識や認識はしっかりしているべきである。

3. タテ軸を見るな！

●いわゆる「変化点」

株価変動は、うねりと呼ばれる適度な上げ下げあり、長く大きく上下するトレンドあり……。予測が難しいのは当然として、値動きに「ついていく」際の判断基準は、「天底」ではなく、いわゆる「変化点」であるべきだ。

「株で儲けるためには、安く買って高く売ることだ！」

実に当たり前の説明だが、この言葉のイメージをそのまま行動に移そうとしてもダメだ。「安く」「高く」の部分が、有効な実践にはつながらないからである。

例えば、300円ではいつくばっていた銘柄が600円になった……すでに倍化しているわけだが、「勢いがある」と判断して600円で買う戦略だつて否定できないだろう。

300円ではいつくばっている銘柄は下値不安がないから買い有利……これは正しい考え方ののだが、「いつ動き出すかわからない」というリスク要因を考えることも大切だろう。

正しい実践のイメージは、誤解を恐れずに表現すると、次のような言葉になる。

「高く買い、さらに高値で売る」

「逆張りで買うのが美しい」という観念があり、暴落時には「落ちてくるナイフをつかむな」とか「あえてナイフをつかみにいく」などと議論が起ころうだが、実践論ではピン트가ズレている気がする。視点がチャートの「タテ軸」だけに向いているからだ。

私たち投資家はチャートで値動きを見るが、タテ軸が価格、ヨコ軸が時間の経過、この2つの要素しかないのだから、2つを同じように見る、つまり「ヨコ軸を無視しない」姿勢が重要なのである。

「価格」と「時間」、2つの要素で、トレンドを判断する。

「勢いがある」とか「緩やか」とか、「ジリ高から急騰へ変化しそうだ」などと観察するときも、2つの要素のバランスを見ているのだ。

次ページの図は、値動きのイメージである。

下がって底を打ち、兆しの上げからビシッとした上昇トレンド、そして上げ止まって天井を形成、そのあと徐々に弱含んだあと下げトレンドに移行している。

私が意識するのは、明らかに上げに移ったと思える①、下げトレンドに移行したとしか思えない②のポイントだ。

図表4-1◎変化点 (その1)

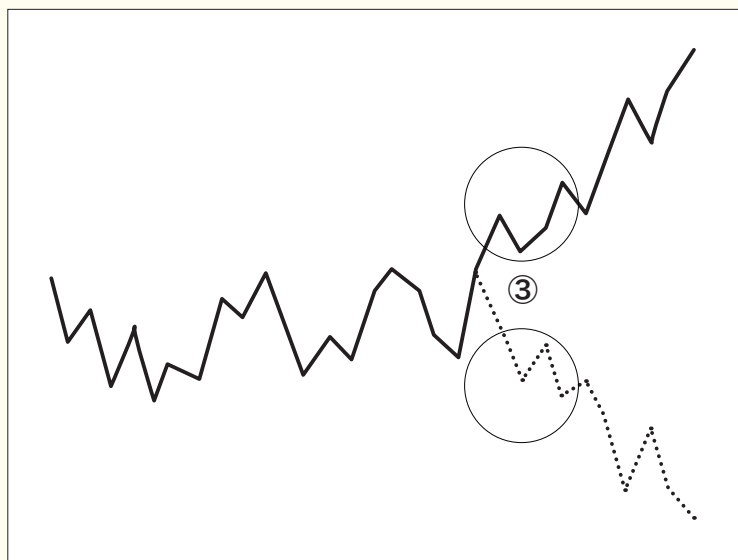


タテ軸だけに注目して、①②それぞれの手前でポジションを取ろうとしても、ひたすら苦しいだけだ。

いざ、思惑通りのトレンドがスタートしたときには精神的に疲弊していて、思ったほど値幅を取れずに降りてしまう……相場あるあるだ。もちろん、エントリーの価格を有利（買い値を安く、売り値を高く）にする試みは否定できない。むしろ、積極的に考えるべきことだ。

でも、「以前に比べて安くなったから買い」「以前よりも高くなったからカラ売り」ではなく、「将来のトレンドが上下どちらか」を考えるのだから、エントリーのタイミングに関係なく、①や②の変化点を意識するのが正しいのだ。

図表4-2◎変化点 (その2)



上の図は、保合（もちあい＝横ばいの動き）から上昇トレンド（実線）、あるいは下降トレンド（点線）に移行する値動きイメージだ。

図の丸印を通過したあとで、「上だ」「下だ」と判断して機敏に乗る、というのが基本のイメージである。

「天井」「底」といった観点が入り込む余地はない。

「割高か割安か」などと、答えが出ないことを必死に考えるのもムダ……。

こんな思考を土台にして「変化点」に注目し、「価格を有利にするために、どこまで先回りして行動を取ろうか」と考えるのが実践者の正しい姿勢なのだ。

●瞬発力の勝負

私は、「瞬発力」という言葉を大切にしている。

といっても、突発的な動きに乗って短期で儲ける……ということではない。

適正な瞬発力をもつために必要なのは、「待つ」イメージである。

- ・ポジションなしで値動きを見る（チャンスを待つ）
- ・波に乗れたらねばる（ポジションを維持して待つ）
- ・ダメだと思ったらサッと切る（次のチャンスを待つ）

「瞬発力」があるから、待つことができるのだ。

そのためには、自分のスタイルを決めてトレードに臨み、いざというときに自分らしくサッと行動する心構えが重要だ。

突発的な値動きを見て「なにかしてやろう」なんて、行きあたりばったり、思いつきで行動する気持ちが少しでもあると、カネが増減する相場の世界ではカンタンに自分を見失ってしまうだろう。

『株式投資の基礎知識 新常識』

林投資研究所「チラ読み」は、ここまでです。